

梅酒特区 取得目指す美郷 (吉野川市)

青いダイヤを再び輝きを

認定で産地活性化狙う

特区取得を進める美郷商工会は五月上旬、美郷梅酒勉強会をスタートさせた。初会合には地元梅農家ら二十四人が出席。講師を招いて、質の高い果実酒の造り方などを学んだ。出席者の一人は「梅酒特区が地域活性の起爆剤になることを期待したい」と意気込む。

梅酒特区に認定されるのは早くも今夏ごろだが、商工会では一年かけて梅酒の造り方などを研究し、来年からの製造・販売を目指している。

「生産しても赤字」

梅は地域にとって単なる農作物ではない。春には梅の花を自当てに大勢の観光客が訪れる。梅農家の天野栄さん(七五)「美郷宗田」は「梅は地域活性化の核。廃れさせてはいけない」と力を込める。

生産量 ピークの4分の1 ▶▶▶

美郷で梅の栽培が始まったのは一九五五ごろ。県が始めた。二〇〇一年は農家が減ったからだ。ある吉野川農業支援センターにまだ四百六十二戸あった農家は「生産しても赤字によると、生産量が最も多かかったのは七八年の四百九十戸で、九九年ごろに原因も百二十戸まで落ちた。

不明の立ち枯れや衰弱被害が出始めた。二〇〇一年は市場価格の低迷で、栽培農家が減ったからだ。ある農家は「生産しても赤字に近く、意欲をそがれる」と言う。

深刻な後継者不足

J A麻植郡美郷事業所の話では、「青いダイヤ」と呼ばれた約三十年前、青梅の市場価格は一キ六百円以上だった。ところが、十年ほど前からは安価な中国、台湾産に押され、百五十二百円と低迷。さらに高齢化や後継者不足にも拍車がかかり、美郷果樹生産組合梅部会の会員数も九八年の百二十人から、六十四人に半減した。六年前からは、青梅ほどの労力がいらなくなった梅酒などを考えている

河野利英会長は「大手の梅酒とは違う独自色が出せるように、無農薬の梅を使った梅酒などを考えている」と話している



梅園を見回る農家。地区の生産量は大きく落ち込んだ。まだまだ「吉野川市美郷の天野梅園」

一部の特産品として梅干しの生産を始めた。今では年間約十六トの青梅を梅干しにしている。次の手として浮上したのは梅酒だ。梅酒特区は、酒税法の規制を緩和し、梅酒を販売するための最低製造量を六歳から一歳に引き下げる新制度。六月中に特区申請の受け付けが始まる予定で市が準備を進めている。

食用ナノハナの出荷額が、青梅を押さえて地区内一位になった。

(吉野川支局・竹内仁志)